

第44回日本看護科学学会学術集会
交流集会2

2024年12月7日

COVID-19看護研究等対策委員会の活動に基づく
研究成果から考える研究・学術推進



COVID-19看護研究等対策委員会
研究・学術推進委員会
合同企画

第44回日本看護科学学会学術集会 利益相反(COI)開示

発表者名(発表順): 須釜 淳子・吉永 尚紀・加澤 佳奈・原 あずみ

すべての演者は日本看護科学学会へのCOI自己申告を完了しています
発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業などはありません

本交流集会の流れ

活動趣旨紹介	須釜 淳子
COVID-19看護研究等対策委員会が行った活動内容および調査結果の概要紹介	吉永 尚紀
調査データに基づく研究成果紹介①	加澤 佳奈
調査データに基づく研究成果紹介②	原 あずみ
総合討論	(コメンテーター) グライナー 智恵子 落合 亮太

2024年12月7日 JANS44 交流集会2

COVID-19看護研究等対策委員会の活動に基づく研究成果から考える研究・学術推進

活動趣旨紹介

藤田医科大学 社会実装看護創成研究センター

須釜淳子



FUJITA HEALTH UNIVERSITY

藤田医科大学

Copyright (C) FUJITA ACADEMY ALL RIGHTS RESERVED



2019－2020年度理事会（真田弘美理事長）重点課題

日本の将来を牽引する若手研究者育成

COVID-19によるJANS会員の研究活動への影響と学会に求める支援に関する調査を行うアドホック委員会

研究者を対象として、調査データの分析および論文執筆を行う研究参加者を公募



2021－2022年度理事会（堀内成子理事長）研究活動の推進

COVID-19によるJANS会員の研究活動への影響の推移と関連要因について継続調査

データオープン化に向けた体制整備
共同研究
データ寄託



謝辞

- 本調査の実施に当たり、日々の臨床、教育、研究、大学運営業務でご多忙の中ご協力いただきましたJANS会員の皆様
- 調査表作成に際し多大なご支援を賜りました理事の先生方：
【2019-2020年度理事会】真田弘美理事長・池田真理理事・石橋みゆき理事・亀井智子理事・鈴木みずえ理事・田中マキ子理事・永田智子理事・堀内成子理事・宮下光令理事
【2021-2022年度理事会】堀内成子理事長・石橋みゆき理事・井上智子理事・江藤宏美理事・大久保暢子理事・亀井智子理事・手島恵理事・近藤暁子理事・中村幸代理理事・法橋尚宏理事・宮下光令理事
- ウェブ調査フォーム構築のご支援いただきましたJANS事務所の有田孝行所長、吉川めぐむ様



COVID-19看護研究等対策委員会が行った 活動内容および調査結果の概要

吉永 尚紀

日本看護科学学会 COVID-19看護研究等対策委員会
日本看護科学学会 研究・学術推進委員会
宮崎大学医学部看護学科

当委員会が行った主な活動

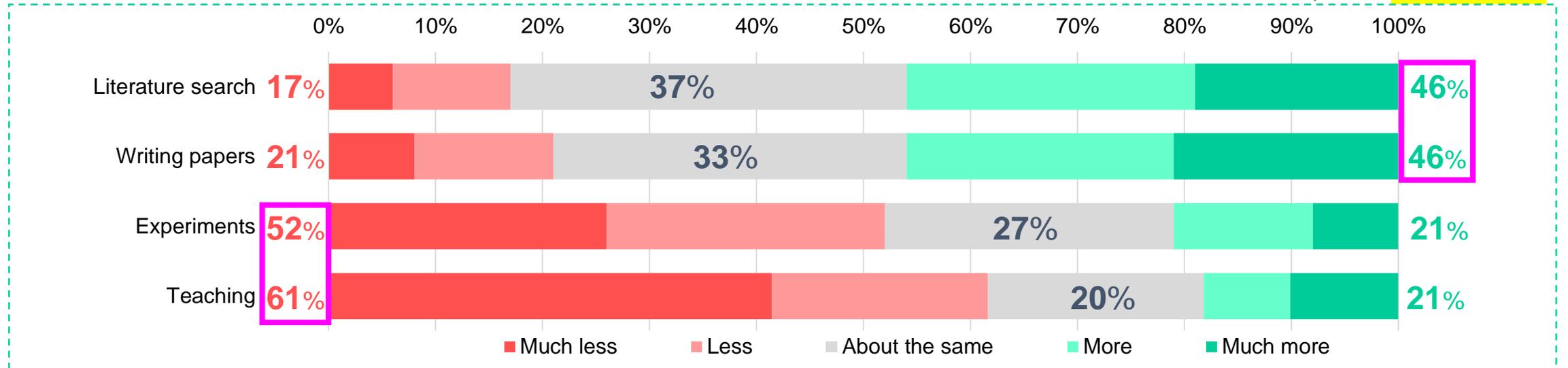
1. 新型コロナウイルス感染症による日本看護科学学会(JANS)会員の研究活動への影響と学会に求める支援に関する調査

- 第1回調査(調査期間:2020年7月1日から8月10日、回答者数:1,532名)
 - 第2回調査(調査期間:2022年3月1日から3月31日、回答者数:899名)
- ※委員会メンバーによる論文2報公表済

調査背景・目的

コロナ禍初期に世界の科学研究者コミュニティを対象に行った調査 (ResearchGate, 2020)

N=3,000 (2020年3月)



ResearchGate: "Report: COVID-19 impact on global scientific community", Mar. 2020.

コロナ禍以前と比較して...

- 「文献検索」「論文執筆」に費やす時間は増加
- 「実験調査」「教育」に費やす時間は減少



看護系研究者では異なるのでは？

COVID-19感染拡大下における、JANS会員（看護系研究者コミュニティ）の研究活動への影響と、会員が必要とする看護研究等の支援策を明らかにする

調査概要



新型コロナウイルス感染症による
日本看護科学学会（JANS）会員の研究活動への影響と
学会に求める支援に関する調査

（調査期間：2020年7月1日から8月10日）

第1回調査（2020年7月1日～8月10日）

日本看護科学学会 COVID-19 看護研究等対策委員会

会員動向調査担当

吉永尚紀・仲上豪二郎・新福洋子・深堀浩樹・須釜淳子

調査報告

2020年9月11日 第1版
2021年2月1日 第2版
2021年3月8日 第3版
2021年5月31日 第4版
2021年6月21日 第5版
2023年12月18日 第6版



新型コロナウイルス感染症による
日本看護科学学会（JANS）会員の研究活動への影響と
学会に求める支援に関する調査

— 第2回調査報告書 —

（調査期間：2022年3月1日から3月31日）

第2回調査（2022年3月1日～3月31日）

日本看護科学学会 COVID-19 看護研究等対策委員会

須釜淳子（委員長）・池田真理・加澤佳奈・新福洋子・田中マキ子・友滝愛
仲上豪二郎・深堀浩樹・横田慎一郎・吉永尚紀

報告書執筆：加澤佳奈・吉永尚紀・仲上豪二郎

2022年6月19日 第1版

2022年8月5日 第1.1版

2023年12月18日 第2版

調査項目の概要(オンラインアンケート調査)

- 基本属性
- 研究活動に対する意欲、費やす時間の変化
- 研究・教育の各細分項目に費やす時間の変化 (ResearchGate調査との比較)
- 研究活動の阻害の程度および阻害要因
- 研究活動への不安
- 研究活動に関する相談相手
- 科研費等の研究費の獲得状況、遂行状況、次年度申請への支障
- 肯定的変化
- JANSに求める支援
- JANSの各委員会が実施している取り組みへの関心 ※第2回調査のみ
- 研究成果の公表状況 ※第2回調査のみ
- 若手教員への支援策 ※第2回調査のみ
- こころの健康状態(K6)、首尾一貫感覚(ストレス対処力:SOC) ※第2回調査のみ

当委員会が行った主な活動

1. 新型コロナウイルス感染症による日本看護科学学会(JANS)会員の研究活動への影響と学会に求める支援に関する調査

- 第1回調査(調査期間:2020年7月1日から8月10日、回答者数:1,532名)
 - 第2回調査(調査期間:2022年3月1日から3月31日、回答者数:899名)
- ※委員会メンバーによる論文2報公表済

第1回調査での支援ニーズ(「JANSが行った調査データのオープンソース化」など)を踏まえて..

2. 取得済み調査データの分析・論文執筆を行う学会主導型研究プロジェクト(共同研究の枠組み)

- 第1期(6チームを採択) ※全チーム論文公表済
- 第2期(4チームを採択:自由記述回答に着目した分析) ※2チーム論文公表済

3. 取得した個票単位のデータ(自由記述回答データ除く)についての研究・教育目的に限定した二次利用可能化

- 東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター(SSJ データアーカイブ)へのデータ寄託

委員会および学会主導型研究プロジェクトによる成果



Japan Journal of Nursing Science

Yoshinaga et al. (2022)
Inoue et al. (2022)
Inoue et al. (2023)
Lee et al. (2023)



日本看護科学会誌

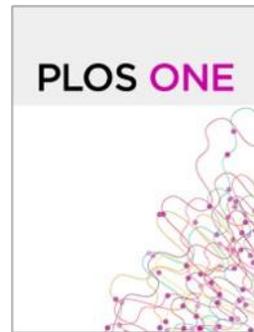
天野ら (2021)
原ら (2024)

11件公表済み



BMJ Open

Kazawa et al. (2022)



PLoS One

Takeuchi et al. (2022)



Nursing and Health Sciences

Nagata et al. (2022)



Research in Nursing and Health

Mitoma et al. (2024)



Journal of International Nursing Research

Kazawa et al. (early view)

委員会および学会主導型研究プロジェクトによる成果

: **第1回**調査データを分析した研究(計8論文)

論文	主な結果
Yoshinaga et al. (2022) 【委員会主体】	看護系大学教員の研究活動に費やす時間の変化に着目: • 71%の大学教員で研究活動に費やす時間が減少 • 関連要因: 私立大学所属、教授・准教授・講師、科研費獲得者
Kazawa et al. (2022)	早期キャリアとシニア(年齢)別で、研究活動の阻害感の決定因子に着目(決定木分析): • 早期キャリア・シニアともにみられた最重要決定因子:「 研究マネジメントの難しさ 」 • 早期キャリア研究者のみでみられた決定因子:「 職位(教授・准教授・講師・看護管理者) 」
Inoue et al. (2022)	大学と臨床の研究者別で、研究活動時間の減少に関連する要因の違いに着目(傾向スコアマッチング): • 大学の研究者で研究時間の減少に関わる影響が大きかった要因:「 オンライン授業への変更 」「 ICT習熟 」「 ICTに関する同僚への支援 」にかかる時間
Inoue et al. (2023)	大学と臨床の研究者別で、研究活動の阻害理由に関する自由記述のテーマの異同に着目(潜在的ディレクリ配分法と主成分分析): • 大学の研究者で特徴的なテーマ:「 研究支援環境の停滞 」 • 臨床の研究者で特徴的なテーマ:「 臨床業務の増加 」「 教育・学習機会の障壁 」

委員会および学会主導型研究プロジェクトによる成果

: **第1回**調査データを分析した研究(計8論文)

論文	主な結果
Lee et al. (2023)	研究活動に影響する個人要因等を探索する予測モデルの構築と評価(機械学習): <ul style="list-style-type: none">・「研究意欲の向上なし」への予測寄与度が高い因子: 研究時間の増加なし・特別警戒地域外に在住・講師・「研究時間の増加なし」への予測寄与度が高い因子: 研究意欲が向上なし・配偶者・パートナーと同居・准教授
Takeuchi et al. (2022)	性別・育児・介護などの個人要因が、研究活動の阻害感に与える影響に着目: <ul style="list-style-type: none">・性別・同居者・育児・介護の状況などの個人要因による違いは認められなかった
天野ら (2021)	研究活動の阻害・促進要因に関する自由記述回答に着目(質的分析): <ul style="list-style-type: none">・阻害要因:【研究計画の実行可能性に対する不確かさ】などの12カテゴリー・促進要因:【既存の価値観に囚われない発想の転換】などの7カテゴリー
Nagata et al. (2022)	学会に求める支援に着目(量的・質的分析): <ul style="list-style-type: none">・会員が必要とする主な支援:「オンラインセミナーや研修の充実(81%)」「コロナ禍での効果的な教育方法の研修(71%)」「JANSが行った調査データのオープンソース化(58%)」・若手や介護に携わっている研究者は、より多くの支援を求めている

委員会および学会主導型研究プロジェクトによる成果

: **第1・2回**調査データを分析した研究(計3論文) ※他2件を論文化中

論文	主な結果
Kazawa et al. (early view) 【委員会主体】	第1・2回調査における、大学所属研究者の研究活動の阻害感の変化に着目： <ul style="list-style-type: none">• 良好維持群9%、改善群18%、悪化群7%、阻害継続群66%• 良好維持群・改善群では、「ICTの習熟や同僚への支援」の阻害要因が特に減少• 悪化群・阻害継続群では、「家庭内での役割負担や葛藤」が持続
原ら (2024)	第2回調査における、大学所属研究者の肯定的変化の自由記述回答に着目(質的分析)： <ul style="list-style-type: none">• 肯定的変化：【研究活動上の選択肢の拡大】【仕事や研究活動に関する価値の捉え直し】などの5カテゴリ• 関連要因：【研究関係者とのつながりの維持】【職場の上司や周りの人たちの支援】などの7カテゴリ
Mitoma et al. (2024)	第1・2回調査での研究活動に対する不安に着目(記述データ・テキストマイニング)： <ul style="list-style-type: none">• 研究活動の不安を感じている人の割合：第1回調査89%、第2回調査80%• 第2回調査で不安の該当者が特に増加した項目：「研究データ収集の困難さ」「研究の内容・質」• 第1回調査のみでみられた不安のカテゴリ：「図書館の利用制限」「教育・研究活動におけるICTの活用」「共同研究の停滞」「時間と環境」

調査データに基づく研究成果紹介① : COVID-19看護研究等対策委員会論文

JINR
Journal of International Nursing Research

<https://doi.org/10.53044/jinr.2023-0039>
<https://www.jinr.jsnr.or.jp/>

Original Research

Changes in research activity and obstructive factors among nursing researchers during the first two years of the COVID-19 pandemic: A longitudinal study

Kana Kazawa, PhD^{1,2} , Naoki Yoshinaga, PhD^{1,3} , Ai Tomotaki, PhD^{1,4} , Shinichiroh Yokota, PhD^{1,5} , Gojiro Nakagami, PhD^{1,6} , Hiroki Fukahori, PhD^{1,7} , Yoko Shimpuku, PhD^{1,8} , Mari Ikeda, PhD^{1,9} , Makiko Tanaka, PhD^{1,10} , and Junko Sugama, PhD^{1,11} 

論文はこちらから



**COVID-19パンデミック宣言後2年間における
看護研究者の研究活動と阻害要因の変化：縦断的研究**

加澤佳奈

日本看護科学学会COVID-19看護研究等対策委員会, 研究・学術推進委員会

岡山大学学術研究院保健学域

コロナ禍初期の研究活動には多くの困難が

- 研究活動そのものの難しさ
- **大学に所属する看護研究者**に焦点を当てると…
 - ✓ 医療サービス提供体制維持のための臨床活動
 - ✓ 教育様式の変容、学生のメンタルヘルス対応など
- JANS委員会調査結果



コロナ禍で研究活動が 阻害された程度？

		第2回(宣言から約2年後)				
		とても阻害された	やや阻害された	どちらとも	あまり阻害されなかった	まったく阻害されなかった
第1回 (パンデミック宣言まもなく)	とても阻害された	困難継続群			改善群	
	やや阻害された					
	どちらとも	悪化群			よい状態維持群	
	あまり阻害されなかった					
	まったく阻害されなかった					

約3割のみ

研究目的

- ✓ コロナ禍の約2年間の研究活動状況から、**大学に所属する看護研究者の活動を阻害する要因の変化**を明らかにすること
- ✓ 研究活動の状況に応じた心理的苦痛について検討すること

コロナ禍で研究活動維持・改善したロバストな活動状況の背景を考察 = 看護研究者への優先的支援への示唆

2回のオンライン調査結果を分析

第1回：2020年6～8月

第2回：2022年3月

研究活動の阻害要因

第1・2回調査項目の阻害要因33項目⇒因子分析結果を参考にしながら、概念的に7つに分類

- ①対面接触・移動の困難
- ②研究関係者とのコミュニケーション・研究運営の困難
- ③教育・実践時間の増大
- ④組織管理活動に係る時間の増大
- ⑤ICT習熟の必要性・周困への支援
- ⑥家庭役割の負担や葛藤
- ⑦COVID-19に伴う社会情勢の変化や葛藤

(投稿論文の査読の遅れ、コロナ関連の社会貢献活動等)

7要因の影響を比較できるように標準化得点を算出⇒点数が高いほど、影響(阻害)度合い大

標準化得点 = 各要因で対象者が回答した得点の合計 / 項目数

結果

対象者の属性

基本属性†	n(%)												p値
	よい状態維持群 (n=29)			改善群 (n=59)			悪化群 (n=22)			困難継続群 (n=211)			
	n	n	%	n	n	%	n	n	%	n	n	%	
性別													
女性	27	22	81.5%	59	52	88.1%	22	19	86.4%	208	179	86.1%	.877 ^a
年齢層													
25～35歳		4	13.8%		3	5.1%		1	4.5%		22	10.4%	
36～45歳		10	34.5%		14	23.7%		7	31.8%		57	27.0%	
46～55歳	29	11	37.9%	59	20	33.9%	22	8	36.4%	211	71	33.6%	.107 ^b
56～65歳		4	13.8%		20	33.9%		6	27.3%		57	27.0%	
66歳以上		0	0.0%		2	3.4%		0	0.0%		4	1.9%	
職位													
教授・准教授	29	10	34.5% ↓	58	35	60.3%	21	8	38.1%	210	119	56.7%	.043 ^a
同居者あり	27	16	59.3%	58	32	55.2%	20	10	50.0%	204	114	55.9%	.938 ^a
育児・養育役割あり	28	7	25.0%	58	27	46.6% ↑	20	8	40.0%	204	67	32.8%	.227 ^a
介護役割あり	27	2	7.4%	58	5	8.6%	22	0	0.0%	203	35	17.2% ↑	.062 ^a

† 無回答および「回答しない」「その他」を選択した者を除外

a χ^2 検定, b Kruskal-Wallis検定

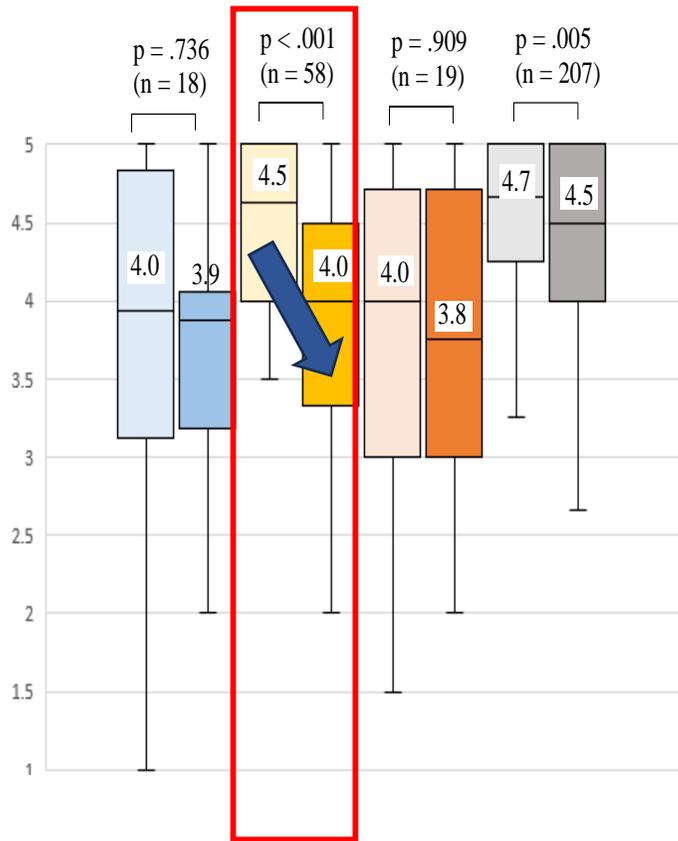
第1回調査時 “良い状態維持群” 影響低

要因	良い状態維持群 (n = 29)		改善群 (n = 59)		悪化群 (n = 22)		困難継続群 (n = 211)		P値
	n	Median (IQR)	n	Median (IQR)	n	Median (IQR)	n	Median (IQR)	
対面接触・移動の困難	22	3.9 (2.9 – 4.5)	59	4.5 (4.0 – 5.0)	19	4.0 (3.0 – 4.7)	209	4.7 (4.3 – 5.0)	<.001
研究関係者とのコミュニケーション・研究運営の困難	28	3.1 (2.0 – 3.5)	59	3.4 (3.0 – 3.8)	21	2.6 (2.1 – 3.4)	211	3.6 (3.2 – 4.0)	<.001
教育・実践時間の増大	29	3.8 (3.0 – 4.4)	58	4.3 (3.6 – 4.7)	21	4.0 (2.8 – 4.1)	211	4.4 (3.8 – 4.8)	<.001
組織管理活動に係る時間の増大	29	3.5 (3.0 – 4.3)	58	3.5 (3.0 – 4.0)	21	3.5 (3.3 – 4.0)	208	3.8 (3.3 – 4.3)	.022
ICT習熟の必要性・周困への支援	29	3.0 (3.0 – 3.8)	59	4.0 (3.0 – 4.5)	21	3.5 (3.0 – 4.0)	210	4.0 (3.5 – 4.5)	<.001
家庭役割の負担や葛藤	28	3.0 (1.8 – 3.3)	57	3.0 (2.3 – 3.6)	21	2.6 (1.2 – 3.1)	206	3.0 (2.0 – 3.6)	.272
COVID-19に伴う社会情勢の変化や葛藤	27	3.0 (2.7 – 3.7)	54	3.0 (2.5 – 3.5)	21	3.0 (2.0 – 3.5)	197	3.0 (2.7 – 3.7)	.098

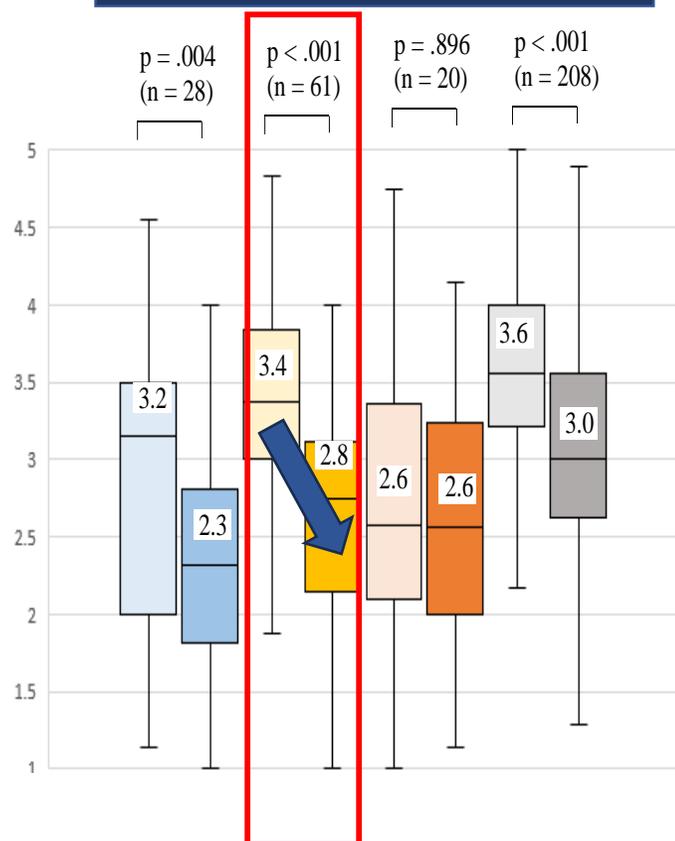
Kruskal-Wallis検定

第1⇒2回 “改善群” 研究様式や教育・実践が大きく改善

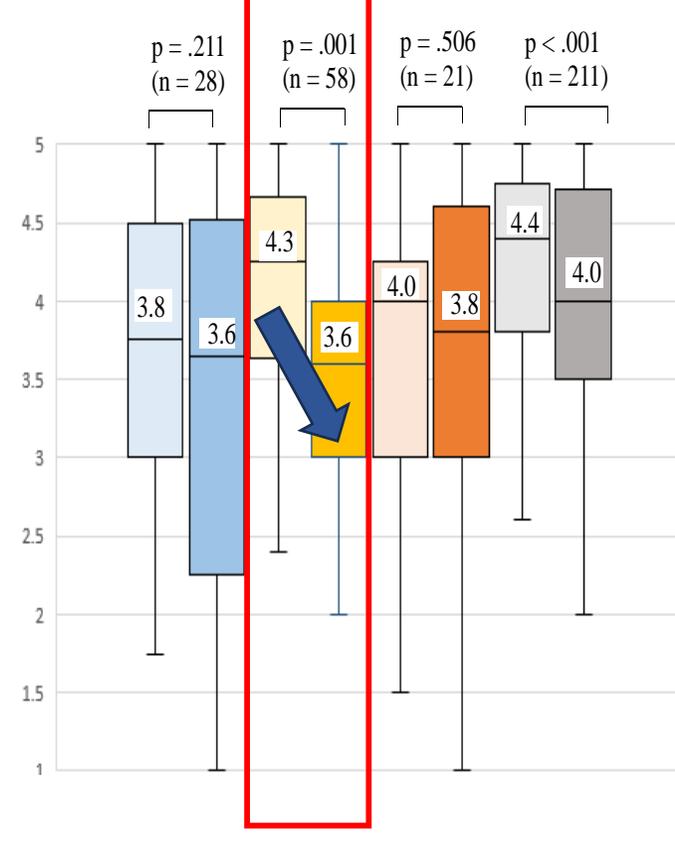
対面接触・移動の困難



研究関係者とのコミュニケーション・研究運営の困難



教育・実践時間の増大

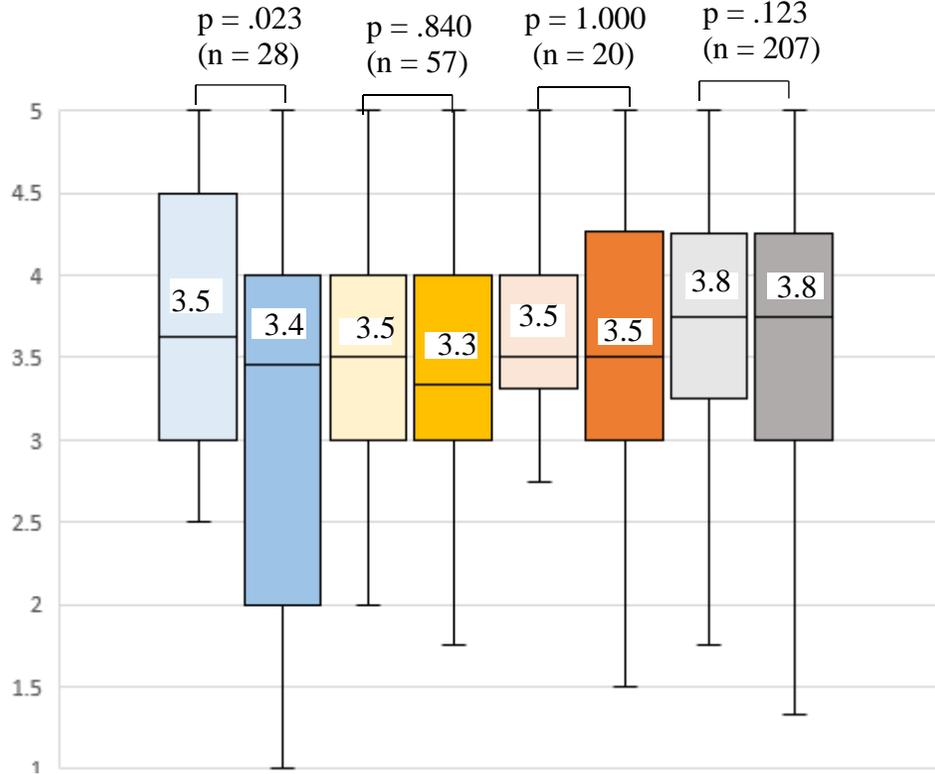


- 第1回: 良好状態維持群
- 第2回: //
- 第1回: 改善群
- 第2回: //
- 第1回: 悪化群
- 第2回: //
- 第1回: 困難継続群
- 第2回: //

得点：5～1点

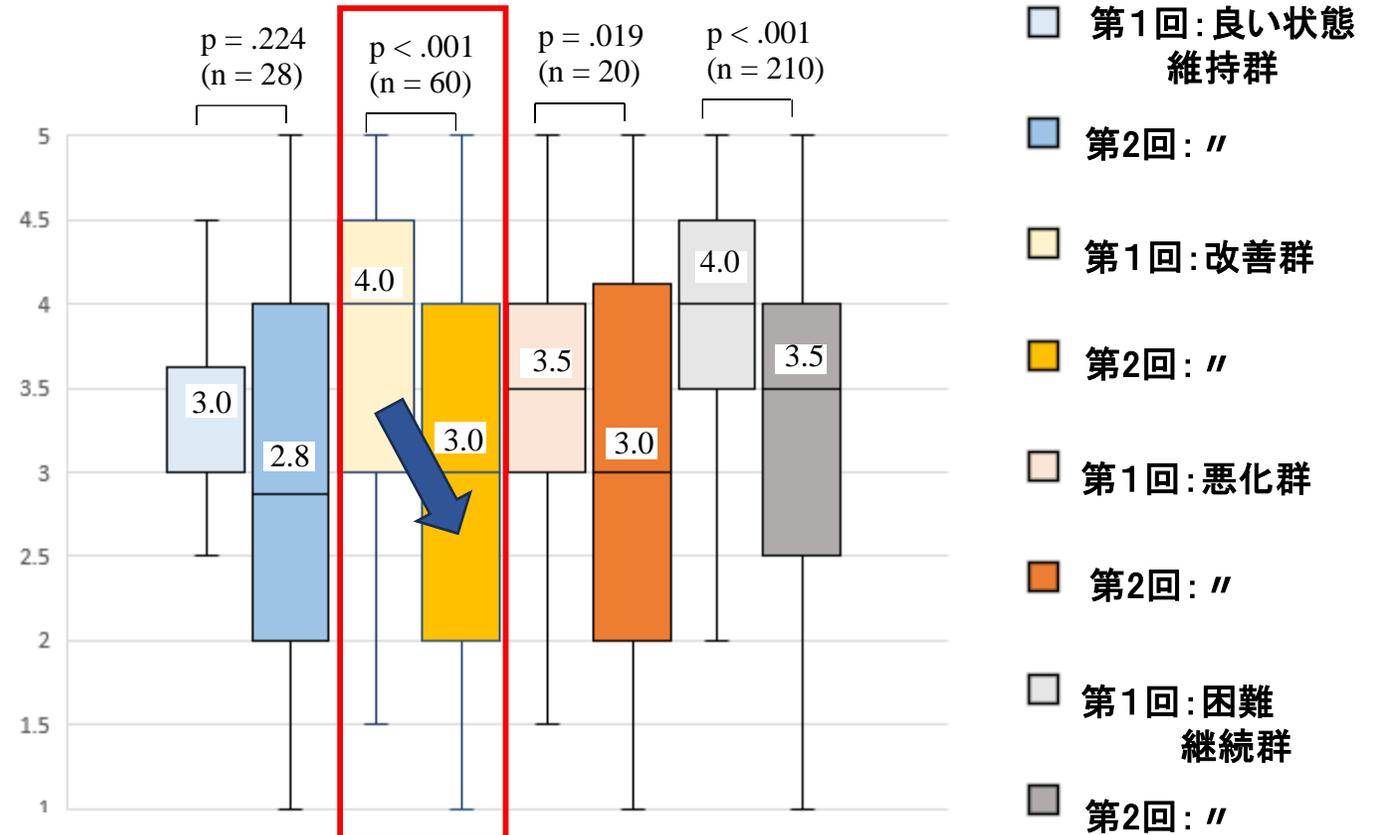
4群とも組織管理は変わりなく…、“改善群” ICT 要因が大きく改善

組織管理にかかる時間の増大



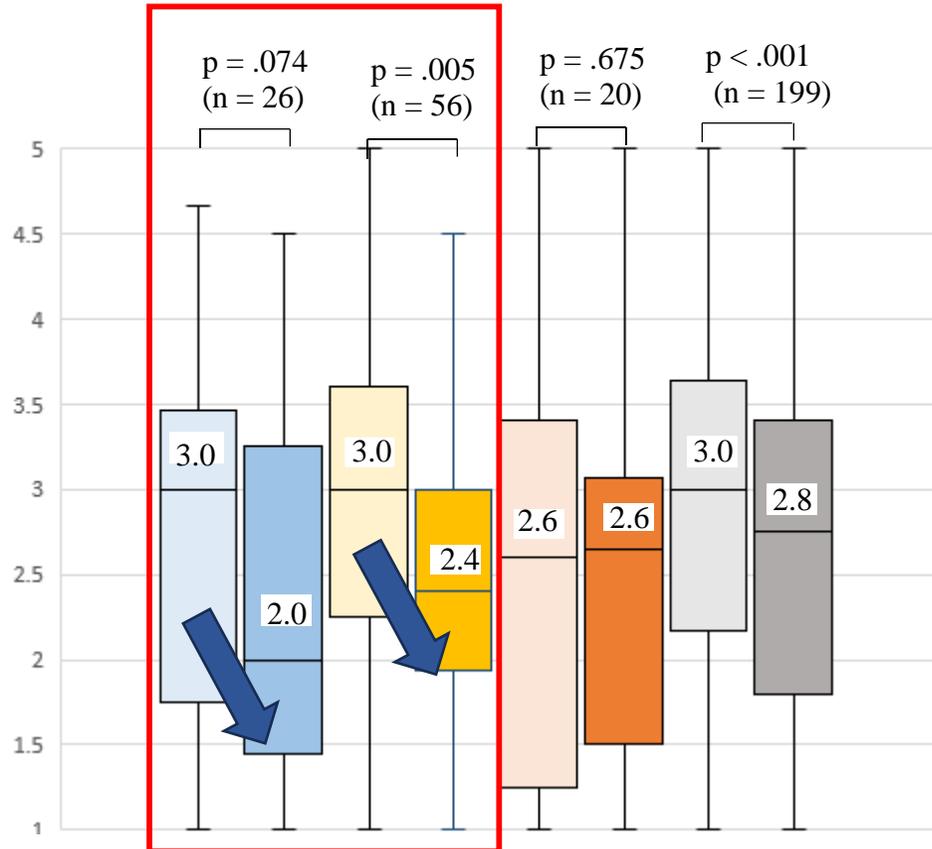
得点：5～1点

ICT習熟の必要性・周囲への支援

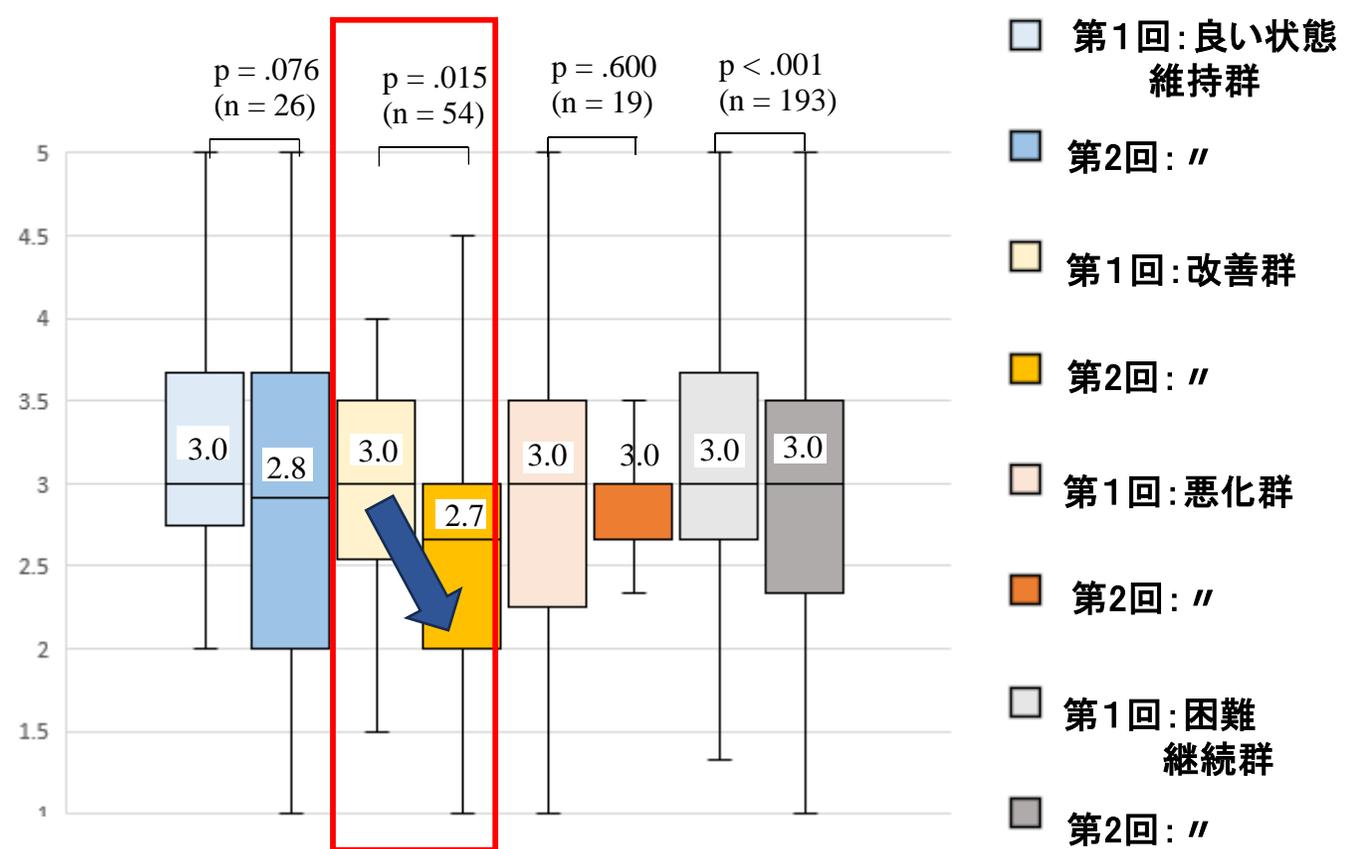


“良い状態維持群”“改善群”で家庭との両立が改善

家庭役割遂行時間の増大や 遂行に関する葛藤



COVID-19に伴う社会情勢 の変化や葛藤



得点：5～1点

第2回調査 “困難継続群”心理的ストレス 高い傾向

項目	良い状態 維持群 (n = 29)	改善群 (n = 54)	悪化群 (n = 20)	困難継続群 (n = 192)	P値
Kessler 6 scale 5点以上の人の 割合: n (%)	13 (44.8 %)	25 (46.3 %)	9 (45.0 %)	111 (57.8 %) 	.259 ^b

χ^2 乗検定

- ✓ **ICTの習熟・有効な利用**や**自宅やオフィスでの柔軟な研究活動を可能にする作業環境の整備**が研究を促進

⇒研究様式へのスムーズな変容の他、研究者間のオンライン会議、新しい仲間とのネットワーキングや共同、バーチャル学会・研修（JANSオンラインジャーナルクラブ）等への参加の促進、教育負担軽減につながる可能性

【学会主導型プロジェクトでの研究者支援】

- ネットワーキング・後進育成
- 構築されたデータプラットフォーム提供による、データ利活用



コロナ禍で変化が小さかった要因「組織管理にかかる時間の増大」

➤ 管理者

- 繰り返す感染拡大に応じ、組織内の感染対策、これを踏まえた組織管理について意思決定し、講じていく必要性
- 特に大学では、教職員・学生のメンタルヘルス支援に加え、看護学生の新しい学習環境の変化、看護実践能力の習得、看護師として働くことやキャリアの不安に対応
- 組織構成員と看護学生へのフォローといった2重の負荷⇒研究活動へ大きな影響



- **組織管理に対する、外部の感染対策やメンタルヘルス専門家による相談対応**
⇒組織管理の意思決定の一助となる可能性
- **看護学生のロールモデルとなる看護師の情報提供や彼らとの交流**
⇒学生の臨床活動やキャリア開発促進となり、間接的に看護研究者支援に

家族役割を担う研究者への支援を検討していく必要性

- 「家族の役割負担と葛藤」のスコア
 - よい状態維持群・改善群：改善
 - 悪化群・困難継続群：改善なし
 - ←家族役割：改善群で子育て、困難継続群で介護ありの者が多い傾向
- 家族役割への社会的支援
 - 子育て支援：学校は一時的閉鎖のみ＋行政・職場の支援や、ワークライフバランスを保とうとする参加者自身の努力が悪影響緩和につながった可能性
 - 介護支援：長引く感染対策⇒高齢者等、要介護者の感染リスクや彼らの心身状態悪化への懸念、介護負担増大



高齢者や家族を介護する研究者のための手段的・精神的・経済的支援制度やピアサポートが、家族役割遂行の葛藤や研究活動の困難軽減につながり得る

COVID-19拡大状況下における看護系 大学教員の研究活動上の肯定的変化： Web調査の自由記述の質的内容分析

原 あずみ

大阪公立大学 大学院看護学研究科

資 料

COVID-19 拡大状況下における 看護系大学教員の研究活動上の肯定的変化： Web 調査の自由記述の質的内容分析

Positive Changes in Nursing Faculty Research Activities During COVID-19:
Qualitative Content Analysis of Open-ended Responses to Internet Survey

原あずみ^{1),*}, 池田真理^{2),3)}, 深堀浩樹^{2),4)}, 加澤佳奈^{2),5)}, 吉永尚紀^{2),6)}
Azumi Hara, Mari Ikeda, Hiroki Fukahori, Kana Kazawa, Naoki Yoshinaga

キーワード：COVID-19, 看護系大学教員, 研究活動, 肯定的変化, 質的研究
Key words: COVID-19, Nursing faculty, Research activities, Positive changes, Qualitative research

Abstract

Purpose: To explore positive changes and related factors in the research activities of faculty members at nursing universities during a period of approximately two years in which nursing research activities stagnated due to COVID-19.

Methods: Of the 899 respondents who agreed to a web-based questionnaire survey conducted in March 2022 targeting members of the Japan Academy of Nursing Science, qualitative content analysis was carried out on the open-ended responses of 355 faculty members at nursing universities who responded to open-ended response topics such as "positive changes."

Results: Five categories of positive changes were identified, including "expansion of options in research activities," and "reassessment of values related to work and research activities." Additionally, seven categories of related factors were identified such as "maintaining connections with research personnel," and "changes in working and living environments triggered by COVID-19."

Conclusion: Through their experiences with COVID-19, faculty members at nursing universities recognized that they could improve the efficiency of their research activities and facilitate communication by utilizing online and digital technologies. The results suggested that maintaining connections with research personnel and the continuity of remote work use were associated with positive changes in research activities.

要 旨

目的：COVID-19 拡大によって約 2 年に亘り看護研究活動が停滞している状況から、看護系大学教員

受付日：2024 年 1 月 24 日 受理日：2024 年 5 月 10 日

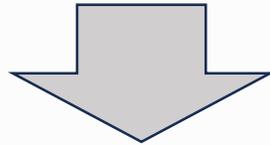
1) 大阪公立大学大学院看護学研究科 Graduate School of Nursing, Osaka Metropolitan University 2) 日本看護科学学会 COVID-19 看護研究等対策委員会 COVID-19 Nursing Research Countermeasures Committee, Japan Academy of Nursing Science 3) 東京大学大学院医学系研究科 Graduate School of Medicine, The University of Tokyo 4) 慶應義塾大学看護医療学部 Faculty of Nursing and Medical Care, Keio University 5) 岡山大学大学院健康科学域 Faculty of Health Sciences, Okayama University 6) 宮崎大学医学部看護学科 School of Nursing, Faculty of Medicine, University of Miyazaki

* E-mail: azumi-h@omu.ac.jp

【背景】

- 第1回調査では看護学研究者が挑戦する思考と行動力を発揮していたとの報告（天野ら，2021）もあるが，国内外の研究より研究活動上の肯定的変化や要因については十分な知見が得られていない

例えば，看護分野では肯定的な変化の1つとしてデジタルツールの活用が報告されているが，COVID-19により急遽導入されたデジタルツールは，当初は感染対策として対面接触を減らすために活用が強く要請されたものの，**現在は職種により活用状況に差があることが指摘されている**（国土交通省，2023）



- ◆ COVID-19拡大初期の肯定的変化が持続的なものとなっているのか？
- ◆ COVID-19拡大初期の調査では報告されなかった変化や要因が新たに生じているのか？
- 人を対象とする看護学研究者の中でも看護系大学教員は，COVID-19拡大初期に研究活動の遂行や研究参加者のリクルート等において様々な障壁に直面していた（日本看護系学会協議会・日本看護系大学協議会，2020）

先行研究から，COVID-19拡大初期以降も看護系大学教員の研究活動上の肯定的変化を生じていることが推察されるが，包括的に示されていない

質的データの二次分析 (Beck, 2019)

- 初期の研究現象に関連した新たに重要な問いに答えることができる
- 費用対効果が高く、当事者の経験を政策の意思決定に反映できる

【目的】

COVID-19拡大によって約2年に亘り研究活動が停滞している状況から、看護系大学教員が肯定的変化と関連要因をどのように認識しているかについて、日本看護科学学会が2022年3月に実施した第2回調査の質的データの二次分析により明らかにする

【方法】

■ 研究デザイン

質的探索的研究デザイン

■ 分析対象者

日本看護科学学会に所属する会員9,661名中、研究参加に同意した899名（9.3%）のうち、

看護系大学教員は703名（78.2%）で、自由記載項目に1項目以上回答した**355**名（39.5%）

■ データ分析方法

- ・自由記載項目である「肯定的な変化」, 「研究活動を円滑に進めるための工夫」への回答等を分析対象
- ・データの文脈を重視したKrippendorff（1980/1989）の方法を用いて質的内容分析した
- ・看護系大学教員の研究活動上の肯定的変化と関連要因が記述されている箇所を意味内容が変化しないようにコード化し、共通性と相違性に従って分類しながら抽象度を上げ、サブカテゴリ、カテゴリを抽出した
- ・分析過程において、看護学研究者5名で協議を繰り返し、分析結果の解釈の妥当性および信憑性を確保した（Polit & Beck, 2004/2010）

【倫理的配慮】

宮崎大学医学部の医の倫理委員会の承認（審査番号：O-0733-9）および筆頭演者の所属する大学の研究倫理委員会の承認（承認番号：J2022-004）を得て実施した

性別は、**女性**が**8割**、**男性**が**1割程度**

年齢は、**45～64歳**が**6割程度**

職位は、**教授**、**助教**、**講師**の順で回答が多かった

【分析結果：研究活動上の肯定的変化（5カテゴリ，13サブカテゴリ）】

カテゴリ	サブカテゴリ	コード数
オンライン／デジタル化による研究活動の効率化	オンラインツール使用による研究活動に関する移動時間の短縮化	9
	電子データ化の推進に伴う効率的なデータ管理	4
研究活動にかかる経費の削減	研究活動に関する旅費や交通費の削減	7
	オンライン研修の無料配信	1
研究活動上の選択肢の拡大	Web会議システム活用による研究活動のための時間や場所の自由度の高まり	12
	オンライン開催に伴う学会参加の機会の拡大	8
	新たなデータ収集方法の実践	2
研究関係者間のコミュニケーションの促進	遠方の人とのコミュニケーションの容易化	5
	オンラインコミュニケーションの気楽さを実感	4
	コミュニケーションツール利用による研究者間の情報交換や情報共有の活性化	4
仕事や研究活動に関する価値の捉え直し	研究に関する視野の広がり	6
	これまでの仕事を振り返る機会	4
	COVID-19で培った経験が研究活動に活かしている実感	3

【研究関係者間のコミュニケーションの促進】

《オンラインコミュニケーションの気楽さを実感》

仕事で県外に移動しにくく、また移動後に検査を受ける手間が生じた。研究対象者への接触が難しかった。一方、遠隔での会議に慣れ、直接会わなくてもオンラインで交流できることは気軽で便利だとも感じた。コロナが収まっても使用すると思う（教授）



【仕事や研究活動に関する価値の捉え直し】

《COVID-19で培った経験が研究活動に活かしている実感》

COVID-19感染拡大の初年度は、（講義に関する準備に費やす仕事量が尋常ではなかったため）まさに地獄のような日々を過ごした。しかし、基盤ができてから、物理的距離に費やしていた時間がほぼ全て、それ以外の時間に充てることができた
（助教）



【分析結果：関連要因（7カテゴリ、20サブカテゴリ）】

分類	カテゴリ	サブカテゴリ	コード数
個人要因	研究実施を目指した柔軟な思考・行動	従来の研究計画の再検討	11
		COVID-19拡大状況下で実施できる研究内容への注力	8
		研究への前向きな見通しを持つこと	5
		研究計画に対してCOVID-19の影響を先読みすること	3
	オンライン技術の活用による研究活動円滑化のための工夫	データ収集方法へのオンラインの導入	12
		遠隔コミュニケーションによる研究者間の協働	7
		研究活動でのオンラインと対面の併用	4
		クラウドサービス利用による情報共有	3
	研究活動のための資源の確保	時間管理をすること	2
		研究活動に集中できるような物理的環境の整備	2
	研究関係者とのつながりの維持	オンライン環境下での人間関係づくりに配慮	4
		人とのつながりを活かした研究協力の依頼	3
共同研究者と意見交換する場の継続		3	
研究実施に伴う感染リスクへの配慮	研究の範囲や人数の限定	5	
	研究依頼や実施に伴う研究参加者の感染リスクへの配慮	4	
	対面での接触機会の低減を考慮した研究方法の選択	3	
環境要因	職場の上司や周りの人たちの支援	職場の上司や周りの人たちの支援	3
	COVID-19を契機とする働き方や生活環境の変化	仕事や家族のイベントの減少	4
		在宅勤務が可能になる働き方	2
		テレワークによる仕事上の制約の軽減	2

【研究関係者とのつながりの維持】

《オンライン環境下での人間関係づくりに配慮》

感染状況が許せば対面でお会いし、関係づくりや研究に関する視点を合わせるための打ち合わせを行って、その後遠隔打ち合わせとなってもコミュニケーションエラーが生じないように努めました
(講師)



【COVID-19を契機とする働き方や生活環境の変化】

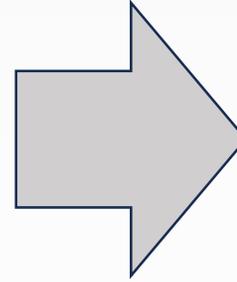
《テレワークによる仕事上の制約の軽減》

在宅勤務を含め、研究時間が流動的になったおかげで、他の教員から仕事を押し付けられることが減り、自分で研究時間を創出することができるようになった（助教）



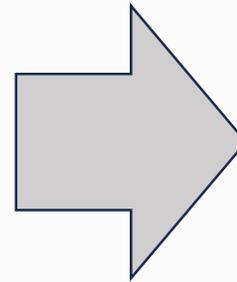
【考察】

- **オンライン技術活用**によって、新たな研究活動の展開を含む研究に関する視点や幅を広げていた



第1回調査との共通点

- 分析対象者が注目していたのは**他者の人間としての反応**であり、オンライン技術を適用することが多い状況でも**関係を維持しながら研究活動を円滑に進めるための解決**を図ろうとしていた



第1回調査との相違点

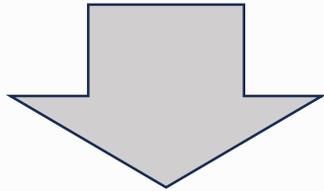
- **省察を通して**、COVID-19拡大に伴う研究活動の危機的状況を乗り越える経験からの気づきを積み重ねることで、**仕事や研究活動に対する意味づけや価値観を変化**させていた

第1回調査

天野薫, 森本浩史, 渡邊梨央, 他 (2021) : COVID-19拡大状況下の看護研究活動の阻害要因と促進要因の探索, 日看科会誌, 41, 656-664.

【考察】

- テレワークにより看護系大学教員の仕事や研究に集中しやすい状況があったことが推測される

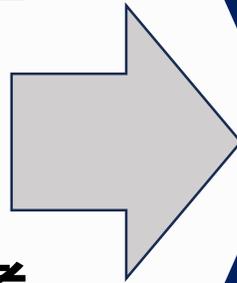


👉 テレワークを単純に適用するだけでなく、**研究活動における時間の自由度を高めること**や**自律性を発揮すること**が可能な環境の整備が必要



【結論】

- COVID-19拡大に伴う**労働環境の変化**や**オンライン技術の普及**によって、看護系大学教員の**仕事や研究活動を省察する契機**となり、価値の捉え直しを引き起こしていた
- 分析対象者が注目していたのは**他者の人間としての反応**であり、看護系大学教員はコミュニケーションを駆使して、周囲の人々との関わりを続け、COVID-19拡大状況下における**対人関係上の課題**に立ち向かっていた



オンライン技術活用やテレワークの適用の**継続性を担保**することにより、看護系大学教員の研究活動を長期的に促進すると考えられる

総合討論：

COVID-19を乗り越えた社会における看護学の研究学術推進のあり方

委員会活動に基づく研究成果からみえたもの

- COVID-19感染拡大が看護学研究者の研究活動に与えたネガティブな影響(研究時間の減少、研究実施困難、研究活動の不安)は甚大であり、その影響は長期間に及んだ
- その影響は、特に個人の職業要因(職位など)や組織内での支援体制の状況により異なっていた
- 一方で、「研究関係者とのつながりの維持」や「職場の上司や周りの人たちの支援」により、「発想の転換」「研究活動上の選択肢の拡大」といった肯定的変化もみられた

学会としてできる支援は？

- 職位やキャリアの違いを踏まえた支援(セミナー、研究助成、研究者ネットワーク構築支援、取得データのオープンソース化など)
- 組織に対する学会等からの提言

各委員会が実施している研究支援への関心(第2回調査時点)

＜第2回調査での回答者の関心＞

セミナー(知識・スキル獲得支援)

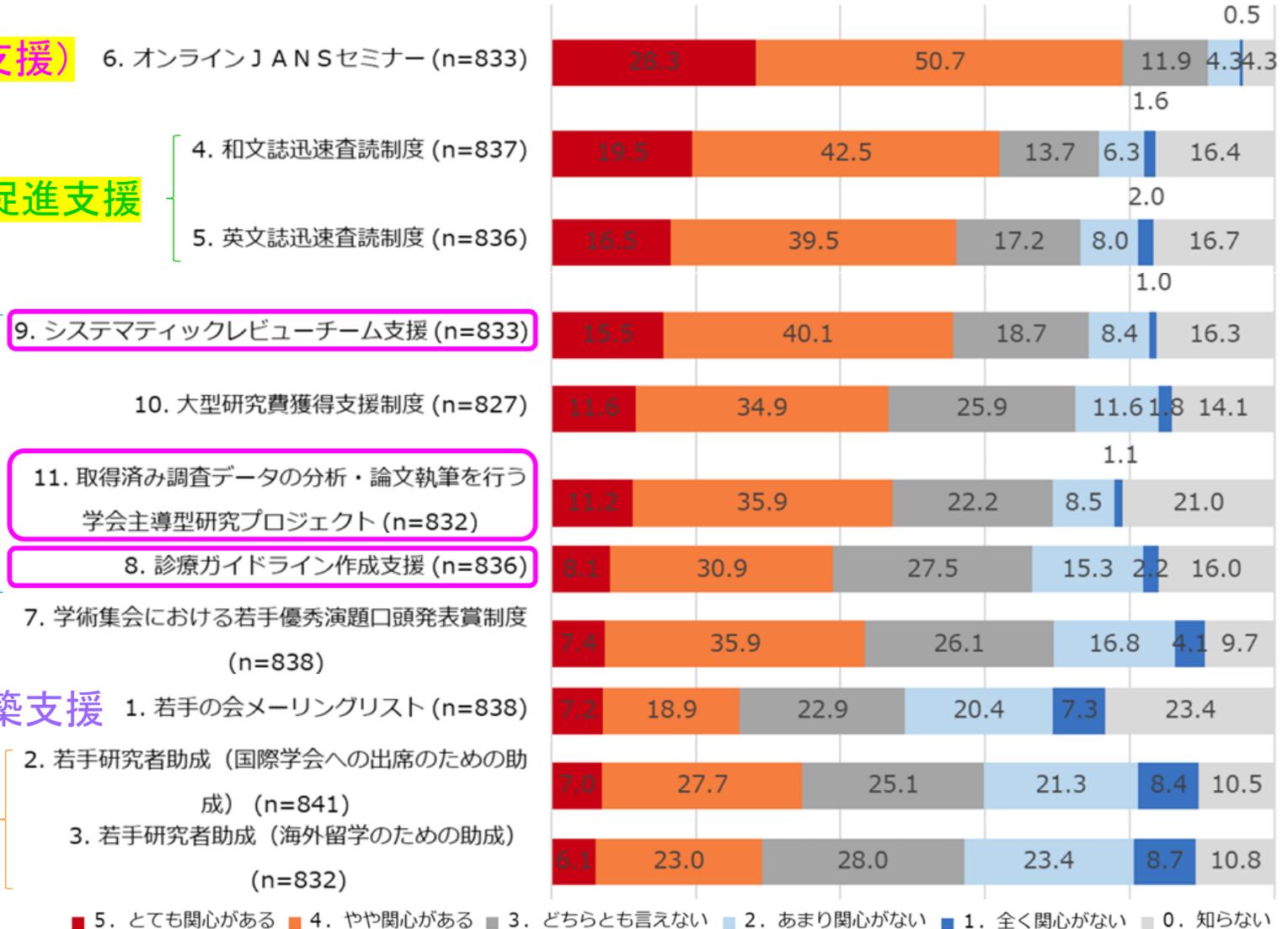
成果発表促進支援

研究実施支援
研究機会拡大支援

モチベーションアップ支援

ネットワーク構築支援

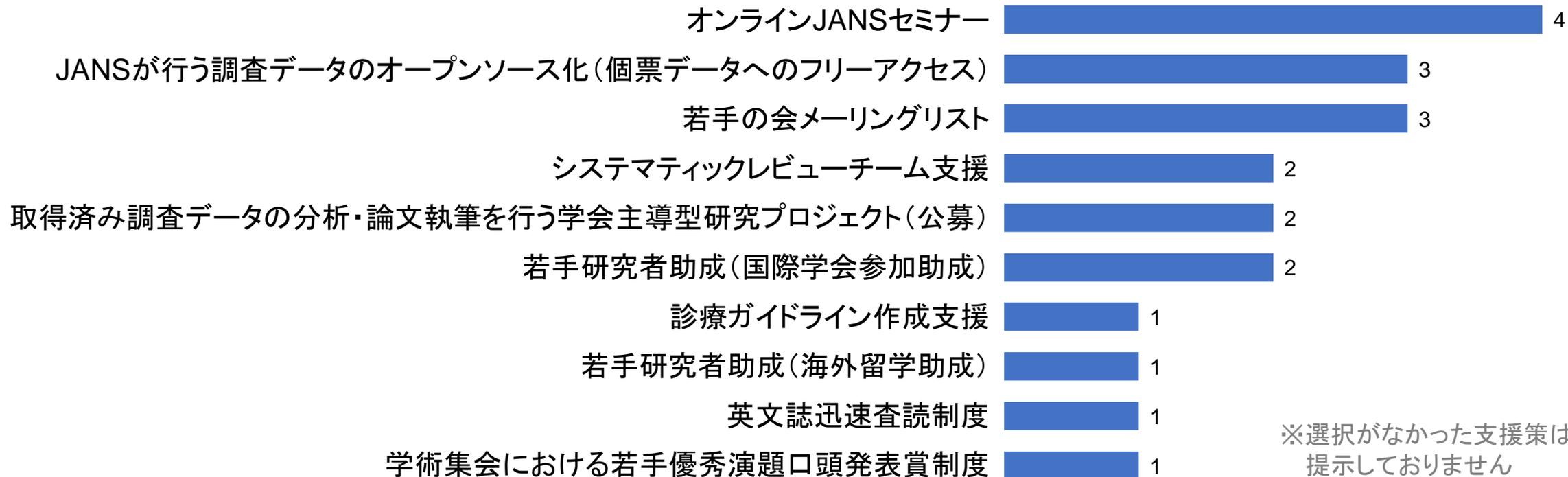
助成



交流集会でのフロアアンケート結果 (N=6*)

*回答結果の公表に同意が得られた方のみ
のデータ

JANSの各委員会が実施している研究活動支援策として、特に拡充して欲しいと思うもの(複数選択)



※選択がなかった支援策は提示していません

現在の研究活動支援策についての意見(自由記述)

- 若手等に行われた支援による成果を、まとめて知りたい

学会による革新的・効果的な研究活動の支援策のアイデア(自由記述)

- オープンサイエンスに関連したセミナーを開催していただきたいです(既存データ分析、データのアーカイブ方法、倫理手続きなど)

総合討論でのコメントの概要

コロナ禍での看護学研究者(特に看護系大学教員)の研究活動への影響:

- 看護系大学教員の多くは看護師でもあるため、コロナ禍で大学のワークに加えて自治体等の支援も行っていたため、研究活動への影響は大きかった。
- 移動制限がある中で研究を進めるにあたり、指導教員や研究者仲間とのコミュニケーション不足の問題があった(地域による違いも大きい)。
- コロナ禍で特に留学生は身近に相談できる相手も少なく、メンタル的に落ち込むことが多くみられ、金銭的な問題や住居の問題などもあった。こうした集団への支援も考えていかなければならない。

コロナ禍でのJANSおよびCOVID-19看護研究等対策委員会の活動:

- コロナ禍の影響で介入研究などが難しくなった状況で、調査・介入を前提としない既存のデータや文献を活用する研究が活発になった。このようなトレンドの変化にこたえられるテーマをJANSセミナーでは扱うことができていたし、システムティックレビューチーム支援といった取り組みも有益だったと思われる。
- COVID-19看護研究等対策委員会が会員対象に行った調査データをオープンソース化したのは画期的だった。今後、会員を対象とした調査テーマを公募し、特に公益性の高いテーマをいくつか選定した上で、主導研究者の主解析結果が論文等で公開された直後に、個票データをオープンソース化するという方法が考えられる。